

中等教育段階におけるインクルーシブ体育の実現に向けた授業づくりの工夫

An invention of the design of physical education classes for the inclusive physical education in secondary education

1K08B241-4 渡辺 翼

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 友添 秀則先生

【序章】

日本では現在、少子化により子どもの人数が減少する一方で、障害のある子どもの数は増加傾向にあり、障害も重複化・多様化している。そのような状況下で、日本では共生社会の実現に向けてインクルーシブ教育への関心が徐々に高まりつつある。障害のある生徒と障害のない生徒とが共に学び合う生活を通して相互理解を深めていくことで、共生社会を実現するための基本的な価値観が育まれる。しかし、特別支援教育に関する制度や理解の遅れから、障害のある生徒が共に学ぶことがほとんど経験されていない。今後インクルーシブ教育の推進に向けて、中学校・高等学校・特別支援学校の連携が求められる。

インクルーシブ教育のもとで行われる体育授業は「インクルーシブ体育」と呼ばれ、身体活動を通した学習という特徴から、インクルーシブ教育の中でも実施しやすい教科として注目されており、これからより積極的に取り組んでいくことが求められている。

本研究では、文献研究や特別支援学校における体育授業に関するインタビュー調査によって、中学校、特別支援学校中学部、高等学校に、特別支援学校高等部に所属する障害のある生徒と障害のない生徒が効果的に共に学ぶことができるインクルーシブ体育の授業を創造するために、教材、教具、学習支援体制の視点での工夫点を探り、実際にインクルーシブ体育の授業で活用できるような工夫の提案を試みることを目的とする。

【第1章】

第1章では、インクルーシブ体育の実態について詳述した。インクルーシブ体育では、長曽我部（2009）の研究から、障害のある生徒と障害のない生徒との間に生じる「まさつ」により相互理解が深まり、障害のない生徒が障害のある生徒に対して適切なかわり方を学習していくことが明らかになった。しかし、体育で問題となる生徒の能力差を考慮してインクルーシブ

体育の授業を創造するためには、生徒の実態を把握し、目標に沿った内容の配列が必要である。そこで、中学校と高等学校におけるインクルーシブ体育の実践例をあげ、インクルーシブ体育の授業が形成される過程から考察を行った。

【第2章】

特別支援学校中学部1校、特別支援学校高等部2校の体育教員3名に対し、障害のある生徒に対する体育授業での工夫点についてのインタビュー調査を行った。中学部、高等部ともに、「次に何を行うか」という行動の手順を、口頭説明だけではなく、生徒が視覚的に把握できるような工夫が行われていた。また、生徒の運動能力ごとにグループを作り、それぞれのグループに合った目標、教材、教具を設定して授業が行われていた。障害の重い生徒に対しては、教員が1対1から1対3の割合で付き添い指導を行なっていることから、インクルーシブ体育の授業を実施するためには、現在の制度では教員の人数が足りないという課題が浮き彫りになった。

【第3章】

第1章と第2章での実践例から、インクルーシブ体育の実現のために必要と考えられる授業の工夫について詳述した。インクルーシブ体育では、生徒の障害の有無や集団の実態を十分に把握し、それぞれの状態に合わせた授業内容の提示と、教育ボランティアや外部指導員による授業補助、学校間での連携が必要になるということを述べた。

【結章】

インクルーシブ体育を実現していくためには、より多くの授業実践や研究が必要であること、そして教員はそれらの実践例や研究成果をもとにしながら生徒のニーズに対応した教材を提供する必要があること、さらに生徒の実態に合わせた環境の整備も求められると結論づけた。